

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
目指す生徒像 「より良き人生を送るために、学び、考え、挑戦する生徒」 「より良き社会を創るために、自他を尊重し、協働する生徒」	① 生徒が主体的に学び、考える授業を目指す。 ② 生徒が自分の夢や目標に向けて挑戦するキャリア教育に取り組む。 ③ 社会人として必要なマナー、モラルを育成する。 ④ 豊かな心を育む教育の充実を図る。 ⑤ 部活動など課外活動の活性化に取り組む。 ⑥ 地域に信頼される学校づくりを推進する。 ⑦ 学校における働き方改革を推進する。

達成	A: ほぼ達成できた B: 概ね達成できた C: やや不十分である D: 不十分である
----	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

① 生徒が主体的に学び、考える授業を目指す。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	授業の充実、改善	・生徒が「学び」「考え」「挑戦する」授業を目指して、生徒の授業満足度を80%以上にする。	・各学期に2回の公開授業週間を設定し、職員が他教科の指導法を学び、考える機会とする。 ・各教科、年1回以上の研究授業を実施し、授業改善を促進する。	A	授業評価アンケートの生徒の授業満足度は、満足している、おおむね満足していると合わせて92.9%であった。	各学期2回の公開授業週間は実施できた。今後、研究授業と組み合わせることで、教員の意識も高まり、授業力の向上につながるかと考える。
		授業における効果的なICT利活用	・ICTを使った研究授業を100パーセントとする。	・各教科で実施する研究授業では、ICT機器を活用し、効果的な活用法について職員間の情報共有を図る。 ・学習用PCのアプリケーションの効果的な活用法について、校内で研修会を実施する。	B	研究授業におけるICT機器の活用は100%であったが、授業評価アンケートではかなり活用している、ときどき活用していると合わせて73.7%であった。	電子黒板の活用は定着してきているが、学習用PCの活用が教科によってばらつきがあることから、活用法について教科間で情報共有する必要がある。
		「学びの基礎診断」活用	・「学びの基礎診断」を活用し、基礎学力定着に向けたPDCAサイクルを確立する。	・測定ツールを活用しながら生徒の学習状況を多面的に評価し、指導の工夫・充実を図る。	A	昨年度と比較して、上位～中位が増え(8.1%→24.3%)、中位～下位が減少した(60.6%→39.3%)。	入試等のため、臨時休校が多くなる2～3月に学習時間が減り、基礎学力が低下する傾向があり、学習課題の配付等に取り組む必要がある。

② 生徒が自分の夢や目標の実現に向けて挑戦するキャリア教育に取り組む。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	『産業社会と人間』における職業観の育成による適切な系列選択	・「系列選択」の満足度を90%以上とする。	・1年次は、「系列」の説明や体験授業を早期に実施し、並行して「職業」に関する進路ガイダンスや進路見学会等を実施することにより、「系列選択」のミスマッチを防ぐ。	A	選択した自分の系列に満足、ほぼ満足が95.9%であった。	「系列」の選択に向けて、例年より早い指導をしたことにより、生徒が自分の進路についてじっくり考える時間を確保することができた。成果を次年度につなげていきたい。
		『ライフネットワーク(総合的な学習の時間)』における系列の特色を生かしたプログラムの実施	・「系列選択」の満足度を80%以上とする。	・2年次は、系列の特色を生かした地域交流、外部機関等と連携したプログラムを実施する。 ・3年次は、系列の学びの集大成としての課題研究を実施する。	A	自分が1年次に選択した系列に満足、ほぼ満足が92.3%であった。	外部機関(大学、企業等)との連携や地域交流に学習に取り組むことで、自分の「系列」で学習している内容を深めることができた。成果を次年度につなげていきたい。
	○進路指導	進路希望の実現	・第一志望の大学・短大・専門学校への合格100%とする。 ・就職内定率100%を目指す。	・進路検討会を充実させ、個々の生徒に適応に応じた的確な進路指導を行う。 ・進路に関する面接指導(相談)を充実させる。	A	希望する上級学校への進学率は100%で、国公立大学や難関私立大学の合格者を出ることができた。就職内定については100%達成でき、その多くは県内への就職であった。	就職については、近年の好景気に支えられている面があり、基礎学力の向上や面接等のコミュニケーション能力の向上に取り組む必要がある。進学については、国公立大学や難関私大の進学を継続していきたい。

③ 社会人として必要なマナー、モラルを育成する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒指導	・基本的な生活習慣の確立 ・交通安全の意識向上 ・情報モラル教育の充実	・時間やルールを守り、周囲に迷惑をかける生活を送る。 ・自転車の交通ルールの遵守を徹底させる ・ネットトラブルに巻き込まれない生徒を育成する。	・定期的な服装指導を実施し、継続した指導を行う。その他、小さなことでも気づいたその場で指導する。 ・交通講話、登下校指導、自転車点検等を行い、交通事故防止、マナー向上に努める。 ・集会等で、ネットトラブルの事例を紹介し、巻き込まれないためのネット利用について説明する。	B	・服装・髪型検査で指導を受ける生徒が減少した。 ・大きな交通事故はなかったが、自転車マナーについて苦情があった。 ・SNSで、不適切な投稿が撤回された。	・自転車運転やSNSの投稿など学校外でのマナーやルール順守について、生徒自身が正しい判断ができるよう指導に取り組む必要がある。

④ 豊かな心を育む教育の充実

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	「がん教育」の推進	・「がん教育」を通して、生徒、職員の「がん」に関する理解を深め、命を大切にすることを育成する。	・職員向け、生徒向けの講話を実施するとともに、「生活福祉系列」の生徒を対象とした研究授業を実施する。	A	がんの学習は、健康な生活を送るために重要だとする生徒が「がん教育」を行う前が69.8%であったが、教育後は、87.7%となった。	生活福祉系列の生徒は、介護福祉士の立場から、直接、がん患者から話を聞く機会があり、がん患者の方も生徒に知ってもらいたいというニーズがあることから来年度も継続していきたい。
教育活動	●いじめ問題への対応	いじめの早期発見と組織的な対応	・生徒の様子を常に観察し、小さな兆候も見逃さない。	・いじめアンケートを年2回以上実施し、状況把握に努める。 ・学年、系列の縦・横の情報共有を密にし、教育相談との連携を図る。	B	いじめの認知件数は1件で、早期発見、組織的な迅速な対応により、短期間で解消することができた。	生徒がいじめを相談しやすい環境づくりに取り組むとともに、人権教育の観点からいじめは絶対ゆるさず、いじめを指導していく必要がある。

⑤ 部活動など課外活動の活性化に取り組む。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○課外活動	部活動の活性化	・部活動参加率を80%以上を維持する。	・未加入者に対しては、加入促進の指導を継続する。 ・部活動を含めた課外活動の在り方について検討する。	B	・全体の部活動加入率は72%であったが、1年生の加入率は83%であった。	1年生は部活動見学の時間を長くしたこと、1年生に関わる職員からの声かけが加入率アップの要因であり、来年度も継続していく。

⑥ 地域に信頼される学校づくりを目指す。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○情報発信	ホームページの充実	・ホームページの更新回数とアクセス件数を昨年度以上とする。	・学校行事、系列の特色ある授業、体験学習、部活動の試合結果等を実施後すぐにホームページに掲載する。	A	・学校の様子を知らせる「清明NOW!」のアクセス件数が昨年を上回ることができた。(9208→11251)	・ホームページへの掲載について、職員から担当者へ情報提供をもっと増やす必要がある。
学校運営	○地域連携	高大連携の推進	・地元の西九州大学と連携した授業、行事等を実践する。	・大学と高校の職員によるミーティングを実施、どのような連携ができるか検討する。	A	2年生の総合的な学習の時間で実施した系列別プログラムで、みどり系列、生活福祉系列、健康スポーツ系列、人文教養系列で西九州大学と連携した授業を行うことができた。	今年度実施した西九州大学との連携による学習効果を検証し、次年度も継続していきたい。

⑦ 学校における働き方改革を推進する。

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の推進	・時間外の自発的勤務時間の月別平均時間が前年度を下回る。	・部活動は、週1日の休養日(平日)と月2日の休養日(土日祝日)を目標とする。	B	・時間外勤務の月別平均時間が7月を除くすべての月で前年度を下回った。	・校務運営に係る業務の削減や、学校行事の見直しについて引き続き検討する必要がある。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	望ましい食習慣と健康に関する自己管理能力の育成	・朝食摂取率90%以上を目指す。 ・保健室利用生徒数が前年度を下回る。	・「保健だより」等で、食生活の大切さを喚起する。 ・健康診断後の受診率を向上させるため、受信勧告書を早めに渡し、受診を促す。 ・保健委員が中心となり教室の換気を行い、感染症を予防する。	B	・1週間で朝食を毎日食べた、食べない日が1日だけあったと合わせると89%と概ね目標を達成できたが、学年、男女でばらつきがあった。 ・保健室利用生徒数は、若干増えたがほぼ昨年並みであった。	・朝食摂取率の向上のために保護者を巻き込んだ指導が必要である。 ・夏期休業明けの保健室利用が多く、休業中の規則正しい生活と健康管理について指導する必要がある。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目